

『叱るな笑うな』

どもの頃、私は親によく叱られました。何が原因で叱られたの

か、いちいち覚えてはいませんが、何故かクレパスのことは覚えています。今はもう、絵を描くことは全くありませんが、小さい頃はよく絵を描いていました。最初はクレヨンを使っていたのですが、少し長じるとクレパスのあの柔らかで優しい色が好きになり、母にクレパスを買ってくれとせがみました。しかし、まだクレヨンのほとんど

の色が半分ほども残っていて、クレヨンがもつと短くなるまで使いなさいと、何時になく強く母に叱られたのです。私が小さい頃の両親は、金銭的にゆとりのある暮らし向きではなかつたのです。私が、クレヨンがどのくらいまで減つたらクレパスを買ってくれるのかと、更に駄々をこねると、母は指で掴めなくなるまで使いなさいと言つたことを、不思議なくらい鮮明に覚えています。その時、我が家家の家計が苦しいことを、私は子ども心にも薄々悟ったのです。

小学校低学年の時、こんな事もありました。担任の先生から、宿題のノートを提出しなさいと言われた時です。私は、宿題を家でやつたけれど、そのノートを忘れてきたと先生に話しました。すると先生は、では今家に帰つて、そのノートを持つときなさいと言つたのです。私は、吃驚しました。確かに、宿題ノートは家に置いてきたのですが、それは意図したことで、実は宿題のことを忘れ、全くしていなかつたのです。これは、しまつたと思いながら、ノートを家に忘れたと言えば、明日持つてきなさいということになるだろうと、浅はかな智恵を巡らしたのです。よもや今すぐ家にとりに行きなさいと言われないだろと、幼い悪智恵で高を括つていたのです。今は、子どもの連れ去り事故そして保護者からのクレーム等が心配で、そんなことは出来ないでしようが、当時の先生はそのように指導されたのです。残念なことに、私の家は学校から徒步数分程の所にあつたのです。両親は共働きでしたので、家には誰もいません。私は急いでノートに宿題を書きました。多分、漢字や九九の類いのものだつたと思ひます。今書き込んだばかりのノートを持って学校へ戻り、先生に提出しました。

先生は、私が提出したノートを見て言いました。
「裕次さん。随分と慌てて書いたのでしょうか。字が粗末で間違いも一杯ありますね。嘘を言つてはいけません。やつていなかつたなら、やつていなかつたと素直に言いなさい。嘘をつくと次にまた嘘をつかなくてはいけなくなりますよ。そしてどんどんと取り返しの付かない所へ行つてしましますよ」

学校と家の距離を考えれば往復十分も掛からないはずなのに、一校時も終わりそうになつて戻つて行くのですから、先生は私の嘘をお見通しなのです。

親 や先生には様々な事で叱られましたが、そのことがトラウマになつたことは一度もありません。それは、叱つた後に必ずフォローしてくれたこと、そして常に慈しみを持って接してくれたからだと思います。そして、叱られた数以上に褒められたことも沢山ありました。親や先生は、私のほんの小さな長所や努力を見出しては勇気を与えてくれました。だからこそ叱られて色々なことを学ぶことが出来たのだと思います。

『子ども叱るな来た道だもの 年寄り笑うな行く道だもの』

何 方が言った言葉か、私には定かではありませんが、この言葉に最初に触れた時、深い言葉だと思いました。「子ども叱るな」これは、単に叱るなではないと思つたのです。叱るならば、自分の幼い日を思い出し慈愛を持つて叱りなさいと諭してくれているのです。人は自分と真摯に向き合つてくれる人を信頼します。その信頼があつてこそ、叱ることが生きてくるのだと思います。

「年寄り笑うな行く道だもの」

生 ある者は、決して若返りはしません。必ず年を重ねて行きます。年老いて、よろよろ歩く年寄りを笑つてはなりません。その年老いた人の人生は決して平坦ではなかつたはずです。幾多の困難を乗り越え果敢に歩んで來た人がそこにいるのです。若い時分には考えられないでしようが、自分も、年老いて行くのです。古希を過ぎて私は、漸く年老いることの必然性に思い至つてゐるのです。年老いるということは、嘲笑の対象ではなく敬愛という微笑みの対象だと、この言葉は私達に教えているのだと思うのです。